Library

第 46 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成15年1月29日

CONTENTS

世界のシルクの町へ飛ぶ(2)　分館長　三浦 幹彦　(2)
分館通信　告知板　(6)
分館日誌　(7)
編集後記　(7)

Library(電子版)はインターネットでも提供しています。
URLは http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html です。

世界のシルクの町へ飛ぶ（２）

分館長　　三浦　幹彦

１．　一枚の絵

前回のあらすじ：アメリカ・パターソンに作られるシルク博物館の記事から，この町と日本のシルクの町岡谷市との間に不思議な関係を見つけた。これで調子にのり，無謀にもパターソンの撚糸・織物技術のルーツ探しを始めてしまった。うまくいかないルーツ探しにあきあきしながら眺めていた小冊子の中から偶然そのなぞを解くてがかりを見つけた。

（続き）アメリカ「シルクの町」パターソンの撚糸・織物技術のルーツを解くカギはイギリス・マクルスフィールドにあるシルク博物館のコリンズ館長（http://www.silk-macclesfield.org/）から送ってもらった小冊子（ルアナ・コリンズ著「マクルスフィールドシルク博物館」）の中にあったのだ。その説明には次のようにある（要約）。

「1860 年以降，シルク従事者にもっとも人気のあった目的地は，アメリカ　ニュージャージー州パターソンであった。ここは，アメリカにおける「シルクの町」で，マクルスフィールドのシルク従事者 1 万 5 千人が移住した。ジョン・ライルはマクルスフィールド近くのボリントンの生まれで，1837 年にアメリカに移住した。彼は，‘パターソンシルク産業の父’として知られている。1861 年のコブデン（Cobden）条約の後，多くのマクルスフィールドシルク労働者が，ライルに続いてパターソンに移住した。移住の最も多かった 1880 年代には，パターソンでのシルク従事者の多くがイギリス生まれであった」。

私が見つけた絵の中の人物，船上で説教を行っているライル司教こそが，パターソンの歴史上著名人物欄にあったジョン・ライルその人だったのだ。パターソンの撚糸，絹織物技術はイギリス・マクルスフィールドの移民達によってもたらされたものだった。

２．シルク王カサリナ・ランバートとビートルズ

ルーツを求めてイギリスに飛ぶ前に，話の出発点となったシルク王カサリナ・ランバート（http://www.geocities.com/pchslc/catholina.html）について少しふれておこう。

1834 年イギリス・ヨークシャーの小さな村に生まれ，ダービシャーの工場で小間使いとして仕えた後，１７歳で５ポンドのお金を持ってアメリカにやって来た。シルク工場の事務手伝いから出発して，一大企業を作り上げた人物として知られている。莫大な富を得た後，小高い丘の上に建てた邸宅は，子供のころ働いていたイギリスの城を真似したと言われている（http://www.midnightsociety.com/web/Buildings/Lambert/lambert.html）。これがランバート城と呼ばれるゆえんだろう。ランバートは一人この邸宅から物思いにふけりながらよく外をながめていたそうだ。「毎日毎日丘の上で一人きり。バカなニヤケ笑いを浮かべながらじっとしている。だけど，だれも彼を知ろうとしない。ただのバカだと思っている。男は決して何も語らない…・フール・オン・ザ・ヒル」と歌うビートルズの’Fool on the hill’（http://www.clinton.net/~sammy/foolhill.htm）は，このカサリナ・ランバート

の外を眺める姿を歌っているという説もあるが，本当かどうかは知らない。晩年はあまりうまくいかなかったらしい。ビートルズが出てきたところで早くイギリスへ飛ぼう。

３．イギリス「シルクの町」へ

残念ながらインターネット上に，マクルスフィールドに関する情報はそれほど多くない。町の様子を見事な写真で解説しているホームページを（http://www.meiboku.demon.co.uk/macc/）眺めた後，イギリス地図帳で町の位置を調べた。マクルスフィールドは北イングランドのマンチェスター近くに位置する町である。さらに，地図によればここには列車の駅があるようなので，英国列車のホームページ（http://www.britrail.com/）でロンドンからの時刻表を調べてみた。ロンドン・ユーストン駅発８時の列車があるので，これに乗れば１０時１１分にマクルスフィールドに着く。もし運良く列車が時刻通りに走れば。特に最近は改修工事のためまともに動く日は少ないようだ。ロンドンから約２時間の距離である。同じ路線でそこからマンチェスターセントラル駅（繊維学部と学術交流があるマンチェスター工科大学 UMIST（http://www.umist.ac.uk/）の停車駅）までは約２５分で着く。これ以上インターネットでは有益な情報が得られなかったので，次にあげる本の助けを借りることにした。

Louanne Collins :Silk Museum in Macclesfield, ,1989

Luanne Collins and Moira Stevenson: Macclesfield; The Silk Industry, 1995, Chalford

Sarah Bush: The Silk Industry, 2000.

これらを参考にマクルスフィールドの歴史を簡単に紹介しておこう。

「マクルスフィールドは，丘と平原という二つの農業地帯の合流点に位置し，地方のマーケットとして繁栄した。少なくとも１７世紀には，イギリス国内のボタン製造産業の中心的役割を果たしていた」。このボタン製造が直接この町でのシルク産業の発展に関係するわけだが，それについては，後にまわそう。「こうして，１８世紀初めには，小さな都市として栄えるまでになっていた。ロンドンからマンチェスターに至る幹線道路がここを通っていたので，商売も盛んに行われていた。チャールズ・ローが１７４３年にシルク工場を建設した後，町の工業化が急速に進んだ。ローに続いてシルク工場があいついで建設された」。シルク博物館付近の地図（http://www.silk-macclesfield.org/）を見ると，博物館の前通りに「ロー通り」というのがあるが，おそらくチャールズ・ローの名前に因んだものだろう。ちなみに，鉄道のマクルスフィールド駅前の通りには「シルクロード」という名前がついている。

町の歴史にもどろう。「ビクトリア時代のマクルスフィールドは，シルク産業と密接に結びついており，深刻な不景気にさらされた」。年代を考えれば，この結果，この町のシルク技術者が新大陸アメリカのパターソンに夢を求めて移って行ったことになる。

「町は，１８世紀後半に，シルク産業の発達と共に発展したので，大勢の働く子供たちに 1796 年に設立された日曜学校を通して教育が行われた。1813 年に，現在，町のシルク博物館となっている新ビルが建てられた」。現在のマクルスフィールドシルク博物館は 1813

年に建てられた日曜学校の建物である。「1920 年代と 30 年代のマクルスフィールドの繊維産業はレーヨンの導入によりにわかに回復した。しかしながら，第２次大戦後，町はもはや繊維に頼らないで新しい産業を振興する努力を行った。今日のマクルスフィールドの人たちは主として，製薬工業とサービス業に従事している」。シルク製品を作る工場は現在でも稼動しているが，すでに，シルクの中心は博物館に移っているようだ。

４．　ボタンとシルク

マクルスフィールドのシルク産業はボタンの製造と深く結びついていることを指摘したが，これについて少しふれておこう。「マクルスフィールドのボタン製造に関する最初の記録は１５７４年である。１７世紀の終わりまでに，ボタン製造は家内工業として繁栄した。女性や子供たちが家でボタンを製造し，ロンドンに出かける商人たちから原料を供給してもらっていた。最初のボタンは実用的というよりも装飾のためであった。ボタンは，大きく丹念に作られていて，その枠は通常木で作られ，シルクとモヘアで覆われていた。チャップマンと呼ばれた行商人が近くの町や村でボタンを売っていた」とある。どうやら木で作られたボタンを覆うものとしてかなり早い時代からシルクが使われていたらしい。最初は，ペルシャ（現在のイラン）とイタリアから輸入したシルクを使っていた。このチャップマンたちがシルク産業の立役者となっていくことになる。最初にシルク工場を建てた，チャールズ・ローもチャップマンであったし，次の人物もチャップマン出身である。「ジョン・ブロックハーストは，最初このボタン行商人であったが，マクルスフィールドの会社に就職した。この会社は大成功を収め，シルクの撚糸，織物やその他のシルク産業に業務を拡張していった。この時以来，ブロックハーストの名前はマクルスフィールドのシルク産業と密接に関係し，彼の名前の付いたこの会社，「ブロックハースト織物」は現在でもシルクの製造に携わっている（残念ながらこの会社は最近他の企業に買収された）」。ボタン行商人を先祖とする会社が，最近まで，マクルスフィールドでシルク生産に携わっていたのである。このボタン製造は次のように政府の保護政策を受けるが，それがあだとなってやがて衰退していく。

「マクルスフィールドのボタンは１７２０年に国会で制定された法律により保護された。これは，服の生地と同じ生地のボタンを身に着けてはいけないというものである。しかし，この法律は，皮肉にも，シルクボタンより安価な金属のボタン（シェフィールドやバーミンガム（http://www.colintonmas.demon.co.uk/Index.html）で製造された）を奨励するはめになった。１８世紀の終わりにはマクルスフィールドでのボタン取り引きはほとんど消滅した」。これでボタンとシルクの関係は消滅したが，これを契機に新たなシルク産業が発展して行ったのである。

５．マクルスフィールドのシルク産業

先に示したように「ボタン行商人であったチャールズ・ローが 1743 年にミル通りとパークグリーンの交差点にマクルスフィールド最初のシルク撚糸工場を設立した」のが，シルク産業発展の第一歩であった。これに続き，相次いで撚糸工場が設立され，それに伴い

シルク産業もますます発展していくことになる。新しい撚糸機の導入も行われた。「撚糸機の最も大きな変化はベルト式長方形機械の導入であった。１８２０年代までにマクルスフィールドでは全ての撚糸機がこの形式の機械に変わった。枠は鋳鉄製でスピンドルは鋼鉄製であった。機械は高速になり小型化した」。また，産業の発展に伴ってシルク機械を製造する工場もできていった。

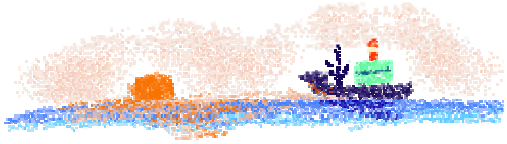
撚糸だけでなく絹織物についても見てみよう。「マクルスフィールドにおける絹織物は１７世紀後半までさかのぼり，最初は家内工業として行われた。シルクは中間業者によって原料が供給され, 織物製品を集め」ていたようだ。「最初, 織物はすべて手機で織られた。工場で織るものもあったが，多くは織工たちの屋根裏部屋で行われた」。「家族全員で仕事を行い，しかも長時間であった。子供はパーンを手伝い，母親が家事の他に一日中織物作業をしているあいだ，小間使いとして働いた」。このように，織工の家族全員がシルク製造にかかわっている姿が浮き彫りにされている。さらに「19 世紀半ばに動力織機が導入されたが，手織りは 1930 年代まで屋根裏で行われ，工場では 1981 年まで行われていた」。この工場は，現在，パラダイス・シルク工場博物館（http://www.silk-macclesfield.org/）として保存され，ジャガード機を用いた元の従業員達による実演が行われている。

「マクルスフィールドのシルク産業は 18 世紀後半と 19 世紀初めに盛んとなった。外国からのシルクの輸入が禁止された時期である。ナポレオン戦争が終わった 1820 年代の初めに短期のブームがあった。1824 年以降，外国シルクへの関税が少しずつ取り除かれ，1860 年には完全に自由化された」。この結果、当然のごとくして「イギリスのシルク産業は縮小し，二三の町だけに残ることになった。マクルスフィールドは，織物デザインと仕立て衣服への展開を図り生き残った」。従来の撚糸、織物だけでなく，新しいデザイン分野に総力をあげて取り組み、厳しい時代を生き残った様子は、今の日本の参考にもなるだろう。このために、マクルスフィールドには織物デザイン専門の学校が設立され、ここからは、優秀な織物デザインの専門家が多く排出している。マクルスフィールドシルク産業の発展から衰退の様子をいそいで眺めてきた。

６．　マクルスフィールドの撚糸，絹織物技術のルーツを探す

インターネット上のランバート城に関する記事から，岡谷，パターソンを通りマクルスフィールドまで「シルクの町」を飛んできた。ここまで来たら，次はマクルスフィールドの撚糸，絹織物技術のルーツを探りたいと考えるのは当然であろう。こうして，再び手がかりを求めて泥沼に足をつっこむことになってしまった。撚糸技術ついては、シルク博物館冊子の中に次のような記述があることを発見した。そこには、「チャールズ・ローは自分の工場を、１７１８年にジョン・ロムがダービーに作った工場を基本に作った」と書かれている。マクルスフィールドで最初のシルク撚糸工場はダービーの工場を真似たものだったのである。こうして，撚糸技術のルーツを求めて次の「シルクの町」ダービーへ飛ぶことになった。（続く）

＊　編者注）　三浦分館長の文中に出てくるホームページへのリンクは、分館長が原稿を書かれた時点のものです。そのため Library 発行時につながらないものがあるかもしれませんがご了承ください。



告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。

次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ（http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/seni/）でご案内していますので、そちらをご覧ください。

⇒ *春季休業中の特別貸出について*

春季休業に伴い、下記の通り貸出期間を延長します。

貸出開始日	大　学　院　生	平成15年1月10日（金）	10 冊以内
	学　部　4　年　生		8 冊以内
	学 部 2 ・ 3 年 生	平成15年1月27日（月）	5 冊以内
	研 究 生 ・ 聴 講 生		3 冊以内
返却期限日	平成15年　4月　8日（火）		

※ 返却期限日は厳守してください。

※ ただし、卒業生は2月28日（金）までの貸出・返却となります。

⇒ *卒業生の皆様へ*

この春卒業予定の学部4年生・M2年生・D3年生に対する図書の貸出・返却期限は **2月28日（金）** までです。必ず期限日までに返却してください。

なお、進学し4月以降も繊維学部に在籍される方は、図書を借りる時に係員にお申し出ください。返却期限日を 4月8日（火） とします。

今までに借りた図書で返却していないものがある場合は、図書館入口のブックポストに投函してください。

⇒ 夜間・土曜開館の休止について

２月１０日（月）～４月７日（月）の春季休業中は、開館時間が短縮されます。

休業中	９：００a.m.～５：００p.m.

※ 業務は通常通り行います。

※ 土曜日は休館となりますのでご注意下さい。

分館日誌

（10月～12月）

10/25	長野県図書館大会（東部町）	出席者－内海係長 滝口
10/28	第３回 信州大学学術情報・図書館委員会（SUNS）	出席者－太田委員
11/7-8	北信越地区国立大学図書館研修会（新潟大学）	出席者－滝口
11/25-27	長野地区国立学校等中堅職員研修（旭会館）	出席者－川西
12/2	第４回 図書委員会	
12/16	第４回 信州大学学術情報・図書館委員会（SUNS）	出席者－三浦分館長 太田委員

編集後記

訳あって年賀状を出すことができなかったため、寒中見舞いで返事を書いているのですが、筆不精のため遅々として先に進みません。早くしないと立春になってしまう・・・それでもたまにはメールではなく、手書きで季節の便りを出すのもわるくないなあと思ったりしながら、楽しんで書いております。（そして余計進まないのでした）

さて今号は、三浦分館長に 44 号の続きをご寄稿いただきました。岡谷、パターソン、マクルスフィールド――と、世界のシルクの町がつながっていく様は、まるで歴史の旅をしているようです。分館長先生、お忙しい中のご寄稿ありがとうございました。次の「シルクの町」ダービーの話も楽しみにしております。

次号は4月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。